

久し振りの京都

塚田 實

四年ぶりに二泊三日で京都を訪問した。二〇一九年甥の結婚式が大阪であり、その機会に京都を巡った。その後新型コロナウイルス感染症の蔓延で旅行は自粛していた。母は二〇一一年東日本大震災の一週間後に亡くなり、今年は十三回忌でコロナも落ちてきてきたので、皆で大阪に集まり、この機会に京都を訪れた。

河原町御池にあるホテルにチェックインし、部屋に入ると窓外に東山の光景が広がる。「蒲団着て寝たる姿や東山」の通り、比叡山から大文字山、伏見桃山まで伸びやかに横たわり、麓には懐かしい真如堂三重塔や南禅寺三門が見える。

祇園北側の馴染みの店で食事を予定していたが、数日前に店の主人から電話がかかってきた。「済んまへん。漏水による工事で店を開けられまへん。代わりに祇園南側の私の友人の店を紹介させていただきます」。紹介された店はお茶屋街の中にある小綺麗な割烹だった。愛想の良い主人をお相手に京料理をたっぷり楽しんだ。

翌日は十三回忌の法要と会食があつたので、夕食はホテルの地下にある割烹で軽く済ませることにした。一品料理を頼みながら酒を飲む。メニューに京都の酒で「京生粹」とある。「伏見の酒ですか」「違います。これは洛中に残る唯一の酒蔵で、佐々木酒造の酒です」「えっ、佐々木蔵之介の実家ですね」「酒蔵は聚楽第のあつたところであり、千利休もお茶を点てた水を使っています」。主人の勧めで京生粹純米大吟醸をじっくり味わった。

東京に戻る朝、大徳寺塔頭芳春院秋吉住職を尋ねた。雨上がりの大徳寺には凜とした空気が漂っていた。住職は抹茶を点ててください、四年ぶりの再会とは思わせぬほど親しく歓談させていただいた。歓談後二〇一七年の前田まつ（芳春院）四百年忌に日本画家・竹内浩一氏の描いた七十二面の襖絵を丁寧に案内され、その後再び抹茶を頂いて寺を辞した。住職は「京都に来られたら、いつでもいらっしやい」と温かい言葉をかけてくれた。